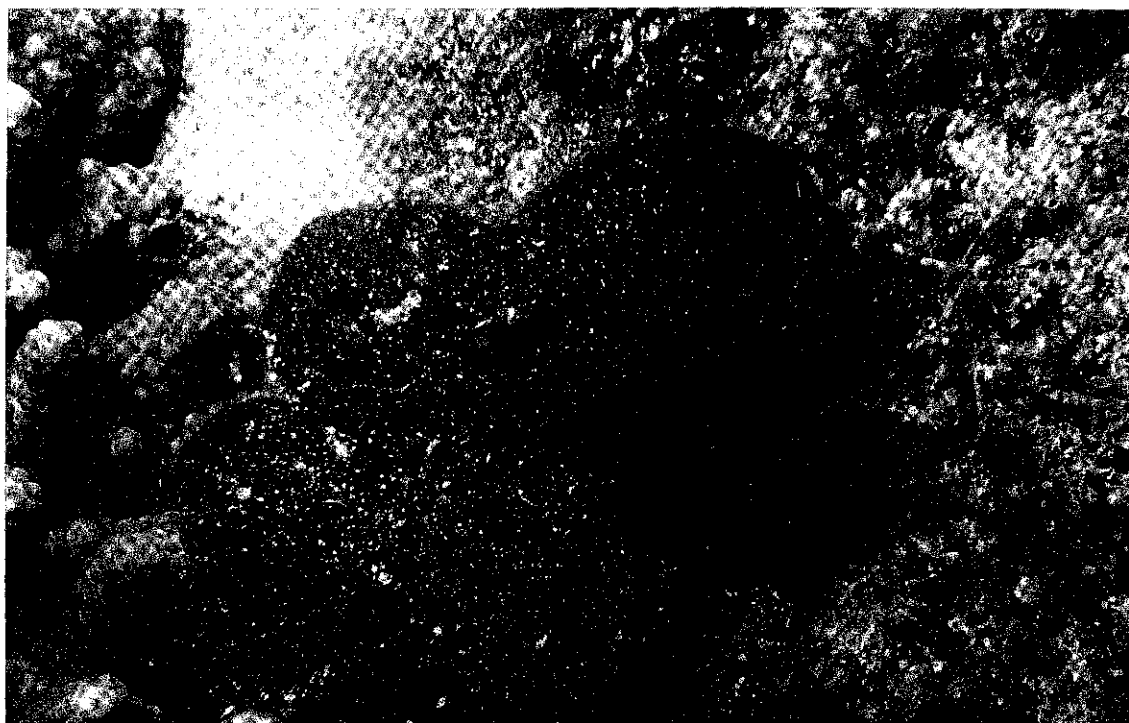


串本海中公園 マリンパビリオン

2001. 7

Vol. 30, No. 7

**コブシミル***Codium pugniformis*

体は丸い不定形の塊状で、これが握り拳を思わせることからこの名がある。表面はつるつるした手触りがあり、強くこすると多量の粘液を分泌する。体を拡大すると、小さな小囊が多数集まってできていることがわかるが、この小囊の大きさはよく似た外見を持つタマミルよりも小さい。色は緑色である。鯖浦では極めて普通に見られる種で、岩礁上の日当たりの良い平らな部分に多く生育する。大きさは直径4～10 cm。ミル科。

S. U.

定置網で漁獲された魚種について (7)

2000年の結果

御前 洋

2000年1月5日から12月30日までに串本の魚市場に水揚げされた定置網漁獲種についてまとめたので報告する。対象とした定置網は串本町大島周辺に設置されているもので、漁獲物の殆どが魚市場に水揚げ後選別されるため、魚市場に出かけて魚種を調べた。なお、前年まで5カ所で行われていた定置網の内、不漁により2カ所が廃業となったため、3カ所の集計となった。定置網は、潮流や風向き、時化などで出漁できない日もあるが、3カ所の内いずれかで水揚げがあれば、その日の漁獲種として集計した。調査日数は153日であった。

漁獲種数

本年漁獲された魚種は312種、この中で表-1に示す25種はこれまで定置網での漁獲記録のない種であった。表中、カラストビウオ、オニヒラアジなど*印を付した9種は串本では初記録種、その中でネッタヒイラギ、キュウセンフエダイ、ニセタカサゴ、アサドスズメダイの4種は、日本産魚類検索(中坊他、2000)による分布域が琉球列島や高知県以南となっており、分布北限の記録と思われる。なお、表中*印の付いていない種は、エビ刺し網、一本釣り、延縄漁などで漁獲または潜水で観察されている串本産既知種である。この度の報告で、定置網での漁獲種はこれまでの532種に新たに25種が加わり、557種となった。

漁獲率の高い魚種

漁獲された魚のうち、全調査日を通じて出現したものはなかった。次に種ごとに漁獲日数を月別に集計してみたところ、年間を通じて毎日漁獲された種はクロアナゴ、ネンブツダイ、キンメモドキなど37種で、この中でウルメイワシ、アカカマス、ムツ、マアジなど22種は、魚市場の「競り」の対象とされる有用種であった。また年間漁獲率(総漁獲日数/調査日数)の高いものにはイサキ・カワハギ(90.8%)、キンメ

モドキ(87.6%)、マアジ(85.0%)、キビナゴ(77.8%)、ネンブツダイ(74.5%)、ウスバハギ(73.2%)、キタマクラ(71.9%)、ミナミハタンボ(70.6%)、ウルメイワシ(68.0%)、ムツ(67.3%)などがあげられる。これら年間漁獲率の高い魚について過去の記録と比較してみると、順位に多少の変動があるものの、ほぼ毎年列挙される常連種であった。ただ昨年まで毎月漁獲されしかも漁獲率の高かったカタクチイワシが減少し(84.5%→56.7%)、代わりにキビナゴが上位を占める(56%→77.8%)という漁獲種の変動があった点は特記に値する。

表-1 定置網で新たに漁獲された魚種

(2000年)

1. シビレエイ科	ヤマトシビレエイ
2. エソ科	*マエソ属の一種
3. トビウオ科	*カラストビウオ
4. ヨウジウオ科	トゲヨウジ
5. ハタ科	キンギョハナダイ
6. アジ科	ロウニンアジ
7.	*オニヒラアジ
8. ヒイラギ科	*ネッタヒイラギ
9. クロサギ科	*イトヒキサギ
10. イスズミ科	テンジクイサキ
11. タカサゴ科	クマザサハナムロ
12. フエダイ科	ハマダイ
13.	オキフエダイ
14.	*キュウセンフエダイ
15.	*ニセタカサゴ
16. イトヨリダイ科	ソコイトヨリ
17. タイ科	クロダイ
18. ヲウチウオ科	ムレハタタテダイ
19.	ワライチウオ
20. スズメダイ科	*アサドスズメダイ
21. ニザダイ科	ヒラニザ
22.	ナガテングハギモドキ
23. アイゴ科	ハナアイゴ
24.	アミアイゴ
25. モンガラハギ科	*オキハギ

*: 串本初記録種

漁獲生物特記事項

このほか定置網で漁獲されたもので記録に値すると思われるものを月を追って列挙する。

(1) 1月5日から10日にかけて連日1~6tのタチウオが水揚げされた。またウスバハギも連日100~200個体水揚げされた。

(2) 1月20日、全長約80cmのマンボウ2個体が捕獲されたが既に死亡していた(2000年度はこの2個体のみであった)。

(3) 2月4日と5日の両日、カタクチイワシの群を追って10数頭のイルカ(種不明)が1つの定置網に舞い込んだ。彼らを網から追い出すのに漁師さんが大変苦労したそうである。

(4) 2月7日、全長約120cmのイタチザメが漁獲され当館に搬入したが、クロトガリザメなど以前から飼育されていたサメによる咬傷が原因で1週間後に死亡した。

(5) 2月16日、約100個体のタイワンカマスに混じって16個体のオオメカマスが水揚げされた。中坊他(2000)による分布域が琉球列島以南とされるオオメカマスは、これまでも1つの定置網で数尾の漁獲記録はあるが、一度に16個体(1群れ?)の漁獲は記録に値する。

(6) 3月26日、4月13日、5月5日・18日・29日、6月4日、の合わせて6日、体長10cm~20cmのヤマトメリベが1個体ずつ漁獲された。これらの個体の飼育を何度か試みるが、イワシやカマス類またイシダイなど多くの魚と一緒に混獲されるため、たとえ魚を取り上げる際に気が付いて先にすくい取って別の容器に移しても損傷が激しく、長期飼育はできなかった。ヤマトメリベの捕獲例は1982年以来久々のことである上、これだけ多くの個体が入手出来たのは記録に値する。

(7) 4月29日、殻長43mm、殻幅26mmのアオイガイ1個体が漁獲されたが、既に死亡していた。1997年10月6日に捕獲されたタコブネ以来の記録である。

(8) 7月6日、全長約40cmのバショウカジキが漁獲されたが、腹部の一部が破損して既に死亡

していた。

(9) 7月29日、中坊他(2000)による分布域が高知県以南とされるキュウセンフエダイ1個体が生きたまま漁獲され入館、砂場の水槽に展示された。全長は約20cm。約1年を経過するが餌をよく食べる割には成長の遅い魚である。本種は1993年以後和歌山県南部港周辺海域で数回の漁獲例があるという。

(10) 8月20日と21日の両日、全長約10cmのハリセンボンが数100個体漁獲された。全長20cm以上の個体の漁獲は時々あるが、小型個体での多数漁獲は前年2月初旬から中旬にかけての漁獲以来の記録である。

(11) 9月14日、中坊他(2000)による分布域が沖縄県以南とされる約10cmのネッタイヒイラギ1個体が漁獲された。

(12) 9月15日に46個体(図-1)、同月24日に75個体のハコフグが同じ定置網で一度に漁獲された。これまで10数個体の漁獲は幾度かお目に掛かったことがあるが、これ程多い漁獲数の記録はないと思われる。繁殖期と関係があるのかどうかを調べる必要がある。

(13) 10月21日、中坊他(2000)による分布域が琉球列島とされる全長70mmのアサドスズメダイ1個体が漁獲された。

以上、1999年2種、2000年4種と毎年分布の北限の記録となる種が漁獲されている。これは1989年以降の黒潮接岸や温暖化による冬期の水温上昇で、南方系の魚が越冬していることが原因と思われる。



図-1. 一度に46個体漁獲されたハコフグ

POLYCHAETOLOGICA (17)

各科の属の検索と種の説明 (2)

サシバゴカイ科 No.1

内田 紘臣

前回 (Vol. 30: 22) では、環形動物門と多毛綱について述べた。そこで、No. 15 (Vol. 30: 10) を見ればわかるのであるが、今回はサシバゴカイ目と、それに続いてサシバゴカイ上科とについて説明するべきである。

しかし、前回の最後にも述べたように、多毛類では各科の分化が著しく、いくつかの科をくくった目や上科についての説明は、科そのものの説明に比べて、はるかに煩雑で、わかりにくいものとなる。それゆえ、多毛綱に続いて、直接各科の説明にはいる。

一番目の科は No. 15 (Vol. 30: 10) にあるように、サシバゴカイ科である。

サシバゴカイ科 (奥田, 1945)

Phyllodocidae (Grube, 1850) Williams, 1852

潮間帯から深海にまで分布し、体は柔らかく、透明感がある種が多く、粘液分泌が著しい。顕著な色彩をもった種も多い。体は比較的長く、多くの体節をもち、比較的速く匍匐する。

翻出可能な細長い口吻をもち、口吻先端には1環列の乳頭状突起が並び、口吻表面にも突起をもつものが多い。口吻にはキチン質の顎や歯はない。

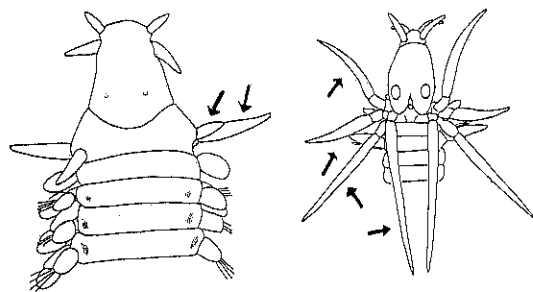
疣足は基本的には無叉型で、1本の足刺と、背腹方向に扇状に配列する複剛毛をもつが、背触鬚の基節内に1本の足刺をもち、亜2叉型の疣足となる属がわずかに知られる。背腹両触鬚共に扁平葉状であるが、いくつかの属の種では背触鬚が背面を覆いつくし、一見ウロコムシ類風の外観を呈する。

本科にはいくつかの亜科が提唱されているが、系統的には問題があるように思われる。

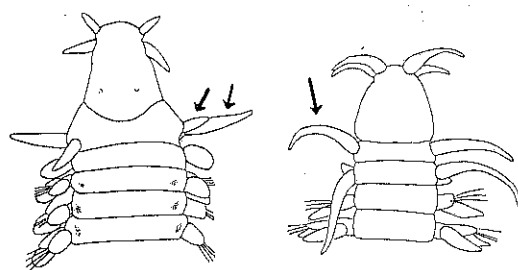
本科の種の同定には口吻の表面の突起の分布が重要な分類形質となることが多いので、固定に際しては口吻を翻出させておくことが肝要である。

属の検索

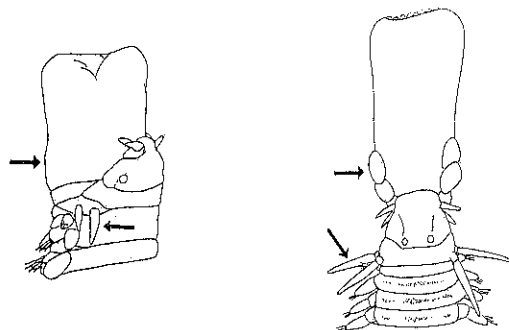
1. 第1体節のみか、第1～第2体節に合計3対以下の触手鬚をもつ 2
1. 第1体節に1対、第2体節に背腹2対、第3体節背側に1対の合計4対の触手鬚をもつ 5



2. 第1体節にのみ、背腹2対の触手鬚をもつ 3
2. 第1体節は1対の触手鬚をもつのみ 4



3. 口吻表面は乳頭状突起を欠き、滑らか。触手鬚は短い *Eteone*
3. 口吻側面に乳頭状突起をもつ。触手鬚は長い *Mysta*

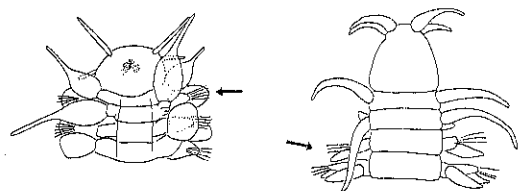


4. 剛毛は第2体節から出現する

Mystides

4. 剛毛は第3体節から出現する

Hesionula

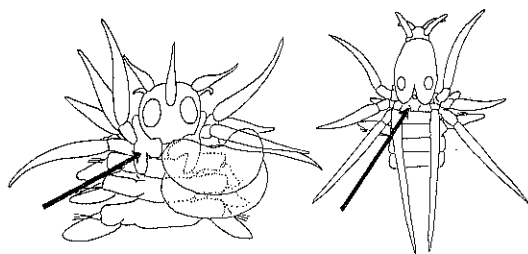


5. 背面, 前口葉の直後に左右1対の特殊なクッション状の突起をもつ

6

5. 前口葉の直後にそのような突起をもたない

7

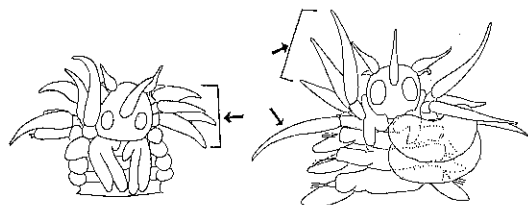


6. 第1～第3体節は背面で癒合する

Nipponophyllum

6. 第1～第2体節のみが背面で癒合する

Notophyllum

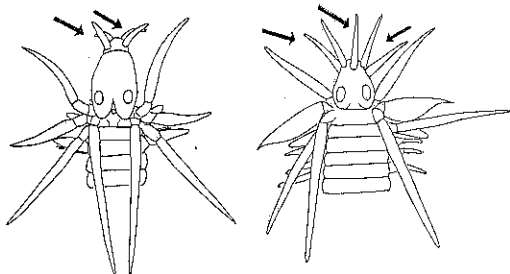


7. 前口葉は4本の感触手をもつ

8

7. 前口葉は5本の感触手をもつ

14

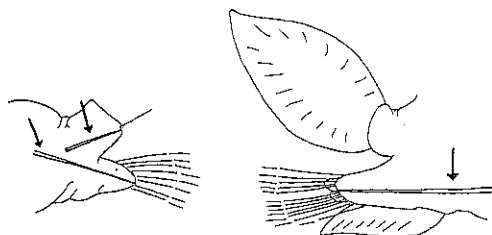


8. 疣足は2本の足刺をもつ

Zverlinum

8. 疣足は1本の足刺をもつ

9



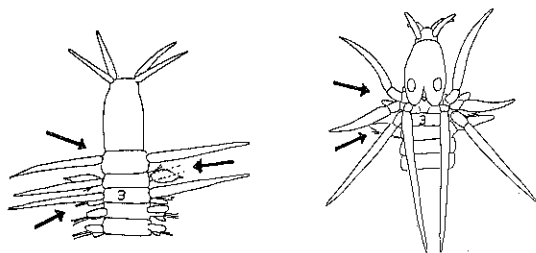
(左図は背腹両触鬚を欠損)

9. 第1～第3体節はそれぞれ背面で分離する

Protomystides

9. 第1～第2体節は背面で癒合する

10

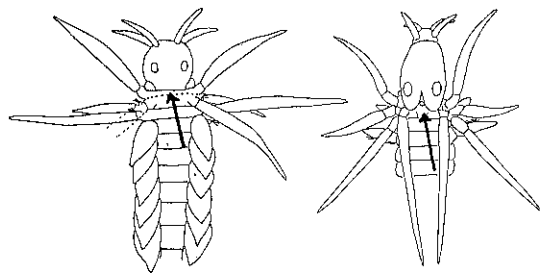


10. 前口葉は頸突起を欠く

11

10. 前口葉は頸突起をもつ

12

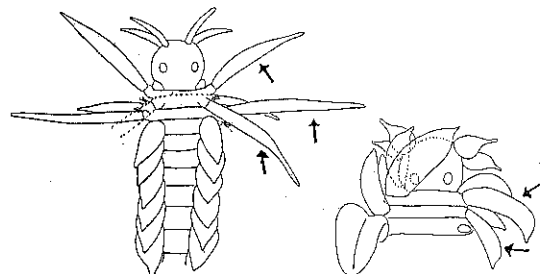


11. 触手鬚は全て紡錘子型

Genetyllis

11. 少なくとも第2～第3体節の触手鬚は平らな葉状

Nereiphylla



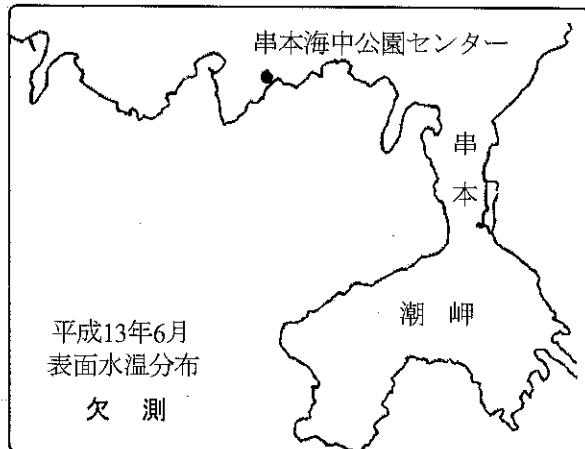
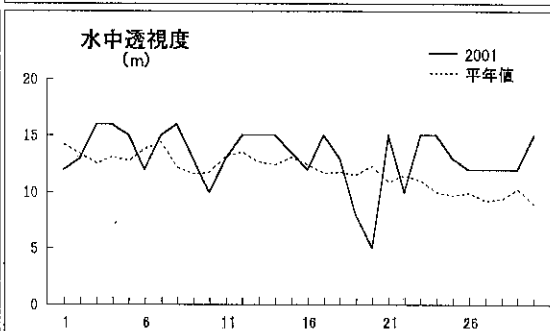
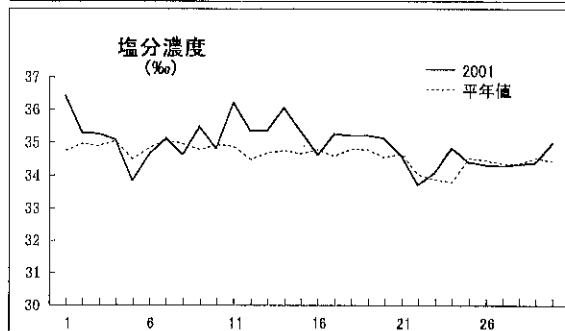
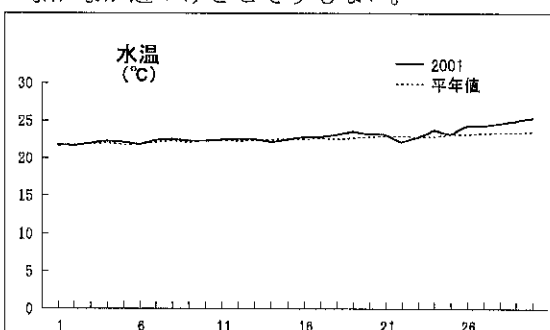
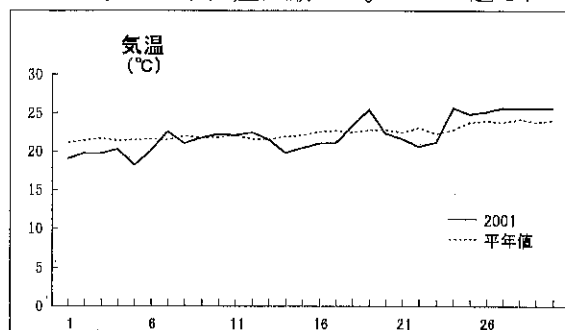
鯖浦の海から

宇井 晋介

6月	気温 22.1℃	水温 22.9℃	塩分 35.0‰
平均値	透視度 13.1 m	月間降水量 142.9 mm	

海の表層と底層で潮の流れる強さや速さが違う場合を二枚潮とか三枚潮などと呼ぶ。これは水温や塩分濃度などが異なる場合水同士がなかなか混じり合わないからだ。初夏から夏にかけては気温の上昇と共に水温差が特に大きくなる。ところで今年の串本はこの水温差が異常に大きい。7月に入って表層の水温が28℃以上に上昇したと言うのに、20mも潜れば水温は16℃台になる。16℃と言えば鯖浦の真冬の水温である。ウェットスーツを着ていても、さすがに10℃以上の水温差は厳しい。スーツ越しに

暑くなったり寒くなったりで、何とも居心地が悪いから、生き物たちにとってはなおさらだろう。ダイビングを楽しむダイバーも、真夏のつもりで飛び込んで目を白黒させている。真夏と真冬が同居している辺りでは、サーモクライン（水温躍層）という境目ができる。こうした場所ではちょうど水に砂糖を溶かしたように、辺りはモヤモヤとして何も見えない。普通台風一過でこうしたモヤモヤは吹き飛んでしまうのだが、異常に強い今年の小笠原高気圧は台風をもなかなか近づけさせそうもない。



マリンパビリオン Vol.30, No.7 通巻355号

一部50円 (年間購読料1,500円送料含む)

印刷日 平成13年7月20日

発行日 平成13年7月25日

郵便振替口座番号: 00990-9-41351

口座名称: 串本海中公園マリンパビリオン

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157

(株) 串本海中公園センター

電話: 0735-62-4875 FAX: 0735-62-7170

<http://www.kushimoto.co.jp/>

印刷所 坂本印刷

串本町串本2481 Tel: 0735-62-0895